

# ザビ家末弟の奮闘記

ボートマン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ガンダム好きの主人公がザビ家の末弟になったことに、驚きながらも死なないように頑張っていく物語

目次

|     |    |
|-----|----|
| 第9話 | 39 |
| 第8話 | 33 |
| 第7話 | 30 |
| 第6話 | 27 |
| 第5話 | 23 |
| 第4話 | 16 |
| 第3話 | 10 |
| 第2話 | 4  |
| 第1話 | 1  |

## 第1話

どうしてこうなったのか俺は考えていた。

今自分の目の前にいるのは、あのギレン・ザビだった。

俺は大学に帰って、疲れから強烈な眠気に襲われ、ソファに横になって寝ていたのに眼が覚めると、俺の好きなガンダムのギレン・ザビが目の前にいたのである。

「さて、レイン聞いているか?」

「えっ!自分ですか!?!」

「そうだ。何をおかしなことを言う。」

「どうやら自分はレインという名前のようだ。」

「お前も知つての通りルウム戦役で捕らえていたレビルに逃げられ、こちらの内情を連邦に知られてしまったが、我々はここで終わるわけにはいかない。」

話を聞くと、今はルウム戦役後でレビルに逃げられジオンにはあまり余力がないことを連邦に知られてしまった時期らしい。

「我々は近々地球に対しての降下作戦を考えている。その降下作戦にお前も参加してもらおう。」

「はい。それで作戦目標はやはりオデッサですか?」

俺は原作を知っているため、ジオンが最初はどこに降下するのかわかってるので問題なく答えた。

「そうだ。よくわかってるな、さすが我が弟だ。」

ギレンの弟発言にどうやら自分はザビ家の人間ということがわかり俺は内心驚き、今自分が着ている佐官服チラツと見てみると階級は中佐であることに更に驚いた。

「お前には後々副官と部下をつける予定だ。何か質問はあるか?」

自分に副官がつけられることを知り、俺は試しに質問してみた。

「一ついいでしょうか?」

「何だ?」

「副官や部下は私が決めてもいいですか?」

「ふむ・・・ドズルやキシリアの部下を引き抜く場合は二人に話を通し

「おげ。」

副官と部下については問題ないようだが、ギレンの言う通りドズルやキシリアの部下を引き抜く場合は二人に話を通さないといけない。「わかりました、ありがとうございますギレン兄様。」

「話は以上だ。もう下がっても良い。」

「はい、失礼します。」

ギレンの執務室を退出して、俺はしばらく歩いて誰もいないことを確認して

「どうなつてんだこれは？」

壁に手をつけてどうしてこうなったのか考えていた。

あの日は疲れてソファにそのまま寝たことは覚えているが、どうして自分がガンダムの世界にいてその上、レインという存在しないキャラになっているのか。

それに髪の色も白色で、黒色だった俺とは違いさらにわからなくなつた。

そう考えていると誰かが近づいてくるのを感じ、何事もないようにし近づいてくる相手確かめると

「ん、レインか。」

「キシリア姉様」

ギレンの次に今度はキシリアと会い、俺は内心驚きまくり叫びたい気分だったが、叫ぶわけにもいかずグツと抑え込む。

「どうした？」

「いえ、なんでもありません。」

「それで兄上の話は何だった？」

「はい。近々行われる降下作戦に参加するようにと言われました。」

「そうか。私としてはお前やガルマにはまだ早いと思うが・・・」

やはり原作同様キシリアはガルマなど弟には甘いようだが、俺は一番下の弟なのかなと考えていた。

「姉様、心配してくれるのは嬉しいのですが私もザビ家の人間です。兵達が戦っているのに私だけ安全な場所にいるのは嫌なのです。」

俺はキシリアにそう言うと、溜息を吐きながらも仕方ないという感

じだった。

「お前がそこまで言うなら仕方がない。だが、死ぬではないぞ。」

「はい。それでは姉様失礼します。」

そう言っただけはキシリアと別れ、俺にあてがわれている部屋に向かうとしたが、どこかわからず警備の兵に聞いて部屋に入り近くにある椅子に座った。

「はあー。本当にどういふことなんだ。」

俺は今でもどういふことかわからずに眩くが

「今は何を言っても変わらないんだ。とにかく俺の出来る限りの事と絶対に死なないようにしなきゃな。」

そのためにはと思ひ、俺は紙とペンを取り出しある機体の設計図を書き始めるのであった。

## 第2話

「よし、できた。」

俺が書き上げた機体は、型式番号MS-09ドムである。

この機体は、ザクと違い熱核ホバーエンジンによるホバー走行により地表を高速で滑走し、重厚な装甲により61式戦車による砲撃では歯が立たないほどである。

その上武装のジャイアント・バズの威力はザクバスターカを軽く超え、ドムのホバー走行と合わせることでヒットアンドアウェイ攻撃を可能とする。

また、熱核ホバーエンジンを熱核ロケットエンジンに換装することで、宇宙用モビルスーツであるリック・ドムに改修することができる。

とはいえ設計図といっても俺が書いたことは、ドムのフォルムとドムに関する特徴や武装についてだけで、後のことはツイマツドの開発者達に任せるつもりである。

降下作戦までに機体が出来ればいいが、出来なければザクで出るだけだ。

「さて、そのためにツイマツド社に話を通すか。」

そう思い俺は部屋を出て、警備の兵にツイマツド社の場所を聞き向かうことにした。

設計図をファイルに入れツイマツド社に移動中、国民に話しかけられて俺はどうに対応していると、顔を隠すように帽子を深く被っている人影が近づいてきた。

人影は俺にぶつかって何処かに行ったが、俺はその瞬間ドムの設計図を入れたファイルがないことに気づいて、俺は話しかけてくる国民から離れ、先程ぶつかった人物を見つけ急いで追いかけた。

ぶつかった人物も俺が追いかけてきたことに気づいて、路地裏に逃げ去ろうとしたがその前に俺がその人物の肩を掴んだ。

「それを返してくれるかな?」

「放して」

人物は逃げようともがいたが、俺は逃げないように腕を抑えた。

その時に人物が被っていた帽子が落ち、人物の素顔が見えた。

「女の子?」

俺は少女の素顔にどこかで見たことがあったかなと思いついてみると、少女から痛そうな声が聞こえ俺は力強く腕を握っていることに気づき力を弱めた。

「すまない。さて、まず君の名前は?」

「・・・マリオン。マリオン・ウエルチ」

俺は少女の目を見ながら名前を聞き、少女は少ししてから答えてくれて、その名前を聞いて驚いていた。

マリオン・ウエルチは、確か連邦に亡命したクルスト・モーゼスのEXAMシステムのせいで意識不明となったニュータイプの少女であることを思い出した。

「そうか。マリオン、まずはそれを返してくれないかな?」

俺はマリオンが盗ったファイルを返してくれるように頼んだが、警戒されているのか返す素振りを見せず俺は

「マリオン。軍に入るつもりはないか?」

マリオンに軍に入隊するか聞いてみた。

「・・・軍?」

「ああ。私も自己紹介が遅れたが、私の名前はレイン・ザビだ。」

「え!レイン・ザビ・・・」

マリオンは目の前にいる軍人がザビ家の人間と思っておらず驚いていた。

「もしマリオンが今の生活を変えたいと思うなら、私と共に来る気があるか?」

俺の言葉にマリオンはどうすべきか迷っていたが、しばらく考え決めたのか俺の顔を見て聞いてきた。

「本当に、本当に今の生活を変えることができるの?」

「ああ。そのためにはたくさんの方が努力が必要だが、今の生活から変わるということは保障しよう。」

俺の言葉にマリオンは決心したのか、俺にファイルを返してくれた。



俺はここで優秀な部下を手に入れたことに内心喜び、この後ドムの設計図をツイマッド社の開発部に渡し、マリオンのために必要な手続きを取るのであった。

それから数日が経ち、今日は副官と部下が配属される日で、その後はツイマッド社に行きついに完成したドムの試作機の調子を確かめる予定だ。

しばらく待っていると、ドアをノックする音が聞こえた。

「入りましたえ」

「失礼します」

ドアを開けて入ってきたのは、ピンク色の髪の女性士官だった。

「クスコ・アル中尉、予定通り着任いたしました。」

入ってきた女性はクスコ・アル中尉で、ニュータイプの素養を持っておりマリオンの補助を考えて引き抜いた人物である。

「ご苦労、楽にして構わない。」

「はっ！」

「来てもらったところですまないが、もう少し待ってくれないか？あと少して残りのパイロットも到着するはずだ、揃ってから話を始めたい。」

「構いません。」

そして、少し待った後再びドアをノックする音が聞こえた。

「入りましたえ」

「失礼します」

ドアを開けて入ってきたのは、長い白髪を後ろに束ねた男性士官だった。

「アナベル・ガトー中尉、予定通り着任しました。」

次に入ってきた男性は、今はまだ呼ばれていないがソロモン撤退戦で連邦から「ソロモンの悪夢」と呼ばれたアナベル・ガトー中尉である。

ガトーは、星の屑作戦の後連邦の部隊によって亡くなった男で、俺

は彼ほど忠義に厚く武人氣質の彼を欲しいと思い引き抜いた。

「ご苦労。ガトー中尉も楽にして構わない。」

「はっ！」

「さて、もう一人はいないが話を始めようと思う。」

そこでクスコは、もう一人のことが気になるのか聞いてきた。

「中佐、もう一人の隊員は今どこに？」

「もう一人の隊員は現在ツイマッドにいる。あとで我々も向かうからその時に顔合わせする予定だ。他に質問は？」

「いえ、ありません。」

「ガトー中尉は？」

「私ありません。」

「さて、知っていると自分が自己紹介させてもらおう。私はレイン・ザビ中佐だ。我が隊は近々行われる地球降下作戦に参加することになっている。この初戦はジオンの勝利への一歩となるだろう、そのために未熟者の私に君達の力を貸して欲しい。」

「はっ！」

二人の返事を聞き、俺は頷くと次に移ることにした。

「隊の編成は全員揃ってからにして、これから我々が使用するモビルスーツを見に行きましょう。」

俺は二人を連れ、ツイマッドに移動し始めた。

「これが私が設計し、今回の作戦で我々が使用する新型モビルスーツ『ドム』の試作機だ。」

「これが中佐が設計したモビルスーツ・・・」

そこには完成した二機のドムの試作機が並んでおり、短い時間で二機も完成させたことに俺は凄いなど驚いていた。

そして、その内の一機のドムからパイロットが降りてきたこつちに近づいてきた。

こつちに近づいてきたパイロットはマリオンだった。

あの後、最初に行ったことはマリオンを軍に所属させた後、すぐに俺の部隊に配属するようにし降下作戦が始まる前に、一緒にモビル

スーツの戦闘訓練を行った。

俺自身も戦闘に関しては何人であったためマリオンと共に戦闘訓練を行ってきたが、マリオンはニュータイプとしての素養がそれともマリオン自身の努力のおかげか、彼女の技術は着実に上がっており俺自身も少しずつ上がっていると感じた。

「ドムの調子はどうだった？」

「問題はなかったわ中佐。」

「そうか、ありがとう。」

そんな風に話している一方、クスコとガトーは最後の隊員が目の前にいる少女ということに驚いていた。

「紹介しよう。君達と同じ部隊の一員であるマリオン・ウェルチ少尉だ。お互い仲良くしてくれ。」

マリオンのことを紹介して、二人はそれでも驚いていた。

確かに、自分より年下の少女が同じ部隊ということに驚くなどということは無理な話だと思う。

その後、作戦中はクスコとマリオン、俺とガトーというふうに分けて行動することにし、今回の作戦ではクスコにドムを預け他の二人にはザクに乗機してもらい今日は解散することにし、明日はクスコにドムに慣れてもらうため戦闘訓練をする予定のつもりだ。

そんなふうに部屋で考えていると、ドアがノックされた。

「入りましたえ」

「失礼します。」

入ってきたのはガトーだった。

「中佐、少しよろしいでしょうか？」

「構わないガトー中尉」

要件はおそらくマリオンについてだと思った。

「マリオン少尉のことです。」

やはりマリオンのことだった。

「少尉が何か。」

「中佐はなぜあのような少女を軍に？」

「確かに軍に入ること勸めたのは私だが、それを決心したのは彼女自身だ。」

「ですが！」

「だから私は最後まで彼女の面倒を見るつもりだ、彼女をこの道に選ばせた者として。」

ガトーの目を見て、俺は自身の本音をハッキリと言う。

これは嘘とかそんなものではなく、幼い少女を軍に引き込んだことに対しての俺なりのケジメのようなものつもりだ。

「・・・わかりました、失礼します。」

俺の意志がわかったのか、ガトーはそれだけ言って部屋を退出した。

ガトーが退出した後、俺は溜息を吐いた。

ガトーの言う通り、マリオンのような少女を軍に入れ戦争に関わらせることは俺も嫌だけど、もし俺があの時マリオンを誘わなければ彼女はモーゼスのEXAMシステムのために酷い目に遭い意識不明になってしまう。

だが、こうしてよかったのか思いながらも、きたる降下作戦に向けて気持ちを引き締めることにした。

### 第3話

現在ムサイ艦内のモビルスーツハンガーでは、試作型ドムの最終調整が行われていた。

ついに第一次地球降下作戦が始まるため、ツイマツドの技術者達とジオン軍の整備士達がお互い協力しながら、大急ぎで試作型ドムの最終調整を行っていた。

一方、レイン達は艦内の一室を借り作戦概要を確認していた。

「我が隊の任務は本隊より先行して降下し、バイコヌール宇宙基地を強襲し基地を制圧する。それに合わせて本隊の第1機動師団は降下を開始し、オデツサ周辺の基地及びオデツサを制圧する。」

俺は与えられた任務内容を説明しながら、無理難題すぎるなど思っていた。

いくら二機のドムでも、基地一つを簡単に落とせるわけでもないのにといいながら命令書を見ていた。

「何か質問はあるか？」

俺は三人に聞いてみたが、誰も質問することはなかった。

「そろそろ最終調整は終わっているはずだ。各員、機体をHLVに移動させるぞ。」

「はっ！」

俺達は部屋を退出し、モビルスーツハンガーに向かった。

モビルスーツハンガーに到着すると、整備士達が敬礼して迎えてくれた。

「機体の最終調整は？」

「はっ！問題なく完了しております。」

俺は整備士に機体の最終調整を完了したか聞いてみたが、問題なく完了しており流石だなと思った。

「苦勞」

俺は礼を言って整備兵に頼んで両肩を白に塗装してもらったドムに乗り込み、もう一機のドムにはクスコが乗りガトーとマリオンはザクIIJ型に乗り込んだ。

そのあと、数機のザクの手を借りドムとザクI I J型をH L Vに搬入した。

それからは地球圏に着くまでの間、外ではルナツィから発進した連邦艦隊が降下を阻止するために攻撃を仕掛け、友軍のモビルスーツ部隊が降下部隊を落とさせないために連邦艦隊と激しい戦闘を行なっていた。

俺は敵の攻撃で堕ちないことを心の中で祈りながら、これから初めて戦闘することを考え緊張していた。

「中佐、そろそろ。」

ガトーの言葉を聞き、ついに始まるのかと思いを引き締めた。

俺達のH L Vは本隊より先に大気圏に突入し、徐々に降下していくと地球の重力を受け、身体が少し重く感じた。

「これが地球の重力か・・・」

降下の途中H L Vは何度か攻撃を食らったが、どうにか無事に地表に到達し俺はH L Vからドムを発進させ機体の状況を確認した。

機体の主武装であるジャイアント・バズに予備弾倉を前後の腰のアーマーに二つずつ装備し、あとは近接兵装のヒートサーベルは間に合わず、今回はザクのヒートホークを後背部に装備している。

「各機、状況を報告せよ。」

俺は自身の機体の状況を確認した後、各機の機体の状況を聞いてみた。

『こちらドム二番機、問題ありません。』

次に出てきたのはクスコの通常の黒いドムで、武装は俺と同じである。

『こちらザク一番機、問題ありません。』

『同じくザク二番機、こちらにも問題ありません。』

続けて出てきたのはガトーとマリオンのザクI I J型で、二機の武装は主武装であるザクマシンガンに予備弾薬を二つを左右の腰のアーマーに装備し、脚部には三連ミサイルポッドを装備しあとはクラッカーを二つとヒートホークを装備している。

全機問題無いことを確認し、もう一度作戦概要を確認した。

「さて、我が隊はバイコヌール宇宙基地に対して攻撃を仕掛ける。」  
これから先、ジオンが戦つていくためにはオデッサは必要なためこの第一次降下作戦は成功させなければならぬ。

そのためにはバイコヌール宇宙基地を制圧し、後続の部隊を降下させなければならぬ。

「私とガトー中尉は正面から攻撃を仕掛ける。その間に、クスコ中尉とマリオン少尉は西側から基地内部に突入し防衛部隊の排除。その後、我々とクスコ中尉達は防衛部隊を排除しながら合流。合流後は司令部と残存戦力を叩く。今回の作戦はこれからの戦いで非常に重要になるだろう。そのために君達の力を私に貸して欲しい。」

『任せてください中佐。』

『任せて中佐。』

『我々はあなたと共に戦います。』

三人の言葉を聞き、俺についてきてくれることにとっても嬉しかった。

「ありがとう。・・・これより作戦を開始する！」

そう言い俺はドムを移動させ、ガトーのザクはドムに追従した。

その頃、バイコヌール宇宙基地の司令であるクレイン・エルギリト大佐は部下に指示を出していた。

「急げ！ジオンのクソつたれどもはもうすぐ来るぞ！」

先程降下してきたHLVを落とすことが出来ず、これから来る敵に基地は慌ただしかった。

「司令！」

「何だ！」

オペレーターに呼ばれ反射的に叫んだが、オペレーターの報告にそれどころでは無くなった。

「防衛部隊が敵MSを確認しました！」

「何！ザクにしては速すぎるぞー！」

ザクの移動速度では、こんなに早く来るはずはなくクレインは困惑していた。

クレインは双眼鏡を使い接近してくるMSを見たとき驚いた。

「まさか・・・新型か！」

それはザクとは違い重厚なフォルムに、ホバー走行により高速でこちらに接近してくる両肩を白に塗装した機体があり、その機体は防衛部隊の砲撃を軽々と避けこちらに近づきつつあった。

クレインは接近してくる新型に底知れない何かを感じた。

「喰らえー！」

俺はジャイアント・バズを61式戦車の部隊に向けて撃ち込み、放たれた実体弾は数車の61式戦車に命中して破壊し、爆風で周りにいた戦車を吹き飛ばした。

戦車隊の一角に穴が空き俺は空いた穴を抜け、防衛設備や別の戦車隊にジャイアント・バズを向け狙い撃つ。

そんな中、ファンファンや別の戦車隊が俺に向かって攻撃しようとしたが、ガトールのザクがザクマシンガンを撃ち撃墜した。

「やはりドムではこの程度か。」

次々と防衛部隊を撃墜していくと、別の場所からも爆発が起きていた。

「どうやらクスコ達も突入したか。中尉！クスコ中尉達と合流するぞ！」

「了解！」

そして、防衛部隊を排除しながら移動していると、こちらに向かって61式戦車の比ではない砲撃が来た。

「あれは？」

「データ照合。あれは・・・ビッグトレイです！」

こちらに向かって砲撃してきたの、連邦の陸戦艦であるビッグトレイだった。

「さすがにビッグトレイの砲撃にはドムは耐えられない。なら・・・中尉！」

「はっ！」



「クスコ中尉達と合流する前にアレを落とす。援護してくれ！」

「わかりました中佐！」

ジャイアント・バズの弾数もすでになく、俺はヒートホークを構えビッグトレーに接近する。

「くっ！」

俺はこちらに撃ってくる砲撃をギリギリで回避し、少しずつビッグトレーに接近していき、ガトールは砲台に向かって残弾数を気にすることなくザクマシンガンを撃ち援護していた。

それでも、ビッグトレーの迎撃は激しく近づけずにいた時、別の場所からの攻撃にビッグトレーはひるみ、俺はその隙を見逃さず飛び上がりヒートホークを艦橋に向かって振り下ろした。

艦橋を潰されたことで、ビッグトレーは動くことはなかった。

「中佐、大丈夫ですか！」

クスコのドムがこちらに近づき、遅れてマリオンのザクも近づいてきた。

「クスコ中尉、先程の援護は助かった。」

「いえ、マリオン少尉が中佐が危ないと突然言いだして、彼女の言う通りに行ってみれば先程の状況で。」

「なるほど。ありがとうマリオン、助かったよ。」

「いえ、あの時は何故か中佐が危ないと感じて。」

マリオンの言葉を聞き、俺はもうニュータイプとしての力が目覚めているのかと思った。

「中佐。まだ作戦行動中ですので」

「ああ、すまない中尉。だが、ビッグトレーを落としたことで彼らにはもう戦意はない。降伏勧告をして、降伏しなければ徹底的に叩くだけだ。」

「わかりました。」

その後、連邦は降伏勧告を受け入れ、現在は新たに降下した歩兵部隊が基地司令部を占拠し、ジオンはバイコヌール宇宙基地を制圧した。

そして、本隊の第1機動師団は降下を開始し、オデッサ及び周辺の

基地や都市を滞りなく制圧し、第一次降下作戦は終了した。

今回の戦闘で、ドムの有用性は大きく示された。

ホバー走行による高速移動、61式戦車の砲撃をもとめない重装甲に、主武装のジャイアント・バズはザクの使用するザクバスターカとは比べ物にならないほどだ。

それに今回の戦闘で得たデータは、ドムの改良などに役に立つだろう。

これからの重力戦線での主力モビルスーツは、ドムに移るだろうと俺は自分が乗ったドムを見ながら考えていた。

## 第4話

第一次降下作戦は成功し、翌日俺はオデッサ基地の一室で、サイド3にいるギレンと通信していた。

「バイコヌール宇宙基地の制圧、ご苦勞だった。」

「いえ、部下や機体のおかげです。私なんてまだまだです。」

「確か、ドムと言ったか。お前が設計した。」

「はい、とはいえ設計と言っても私が書いたことは、基本的なことだけでそれを形にしたのはツイマッド社の技術者達です。」

「そうか。お前には先に言っておくが、地上における主力モビルスーツは正式にドムに採用されることが決まった。」

ちなみに、前回の戦闘データはすでにツイマッドに送っており、今はドムの問題点がないか調べているだろう。

ギレンの言葉を聞き、やはりドムが地上の主力モビルスーツになったかと俺は思った。

「お前には後ほど次の任務についての通達がある。これからもその力をジオンのために尽くしてもらおう。」

「はっ…了解しました！」

そう言つて通信を切り、俺は椅子に座り溜息を吐いた。

「やっぱり総帥と話すとすごい緊張するなあ。」

そう呟きゆったりしていると、また通信が来て俺は座り直した。

通信の相手はキシリアだった。

「どうかされましたかキシリア少将？」

俺はいったい何の用かと思い聞いてみた。

「レイン、そう堅くする必要はない。」

「わかりました。それで一体どうしたんですかキシリア姉様？」

「ああ。一つはバイコヌール宇宙基地の制圧、よくやったレイン。」

「いえ、部下や機体のおかげです。私なんてまだまだです。」

ギレンの時と同じように俺は言い、キシリアの一つはということはまだ何かあるのかと思った。

「そうか。それでもう一つは前回の降下作戦でレインが使用したドム

をガルマに譲ってくれないか？」

「え？」

突然の機体の引き渡しに俺は驚いた。

「レインは知らないだろうが、ガルマは次の降下作戦に指揮官として参加する。ガルマはお前と同じで初陣となるため、お前のドムを譲って欲しいのだが。」

確かにザクに比べドムの方が性能が良く、生存率が高くなるのはわかるが、俺は渡したくないと内心思ったがここは我慢して承諾することにした。

「わかりました。すぐに準備にかかります。」

「そうか。すまないなレイン。」

「いえ、これくらい構いません。」

「ガルマには私から伝えておく。あまり無茶をするなよ。」

「わかっていますよ。それでは姉様。」

そうやって通信を切り、俺は溜息を吐き頭を抱えた。

「やれやれ、本当に困るなあ。」

そうやってボヤいていると、ドアをノックする音が聞こえた。

「入りたまえ」

ドアを開けて入ってきたのは、この基地の兵だった。

「レイン中佐。ギレン閣下からの指令書をお渡しします。」

「ご苦労だった。それとすまないが」

俺は指令書を持ってきてくれた兵に、俺のドムと念のためクスコのドムをガルマの元にするよう命令し、兵は敬礼をして部屋を退出した。

「これはまた・・・」

渡された指令書を見ると、指令書にはオデッサ周辺で潜伏している連邦軍の残存部隊の殲滅が書かれていた。

「ドムを渡すように言われた時に・・・」

すでに渡すことを承諾した時に、この指令はキツイなあと思った。

そして、二機のドムが宇宙に送るためこちらの部隊の戦力補充のために、俺はすでに開発されている指揮官用ザクとザクキャノンの二機

を要請し、ドムが量産されるまで使うことにした。

「とはいえドムと性能を比べると劣るなあ。」

そうぼやきながらも、俺は全隊員を呼んでくるように兵を呼び頼んだ。

しばらくして全員揃い、俺は話を始めた。

「急に集まってもらいすまない。実はギレン閣下から新たな指令が通達された。」

「それはどんな指令ですか？」

ガトーが聞いてきて、他の二人も同じでこちらを見ていた。

「前回の降下作戦で逃げ延びた残存部隊を殲滅するよう指令されている。」

殲滅という言葉に、マリオンの表情が少し暗くなり俺はそれを見て慌てず話す。

「殲滅とは言っても、最初に投降するよう呼びかけるつもりだ。」

「しかし、それでは指令に反するのでは？」

ガトーは命令に反してしまうのではないかと聞いてきたが

「指令には殲滅しろとは書いてあったが、方法については何も書いてはいない。それに捕虜にして情報を引き出すことも大切だ。何か問題はありますか？」

「いえ、問題はありません。」

俺の言葉にガトーは納得したようだ。

「それで出撃は何時？」

「明日の予定だ。今は私と中尉の機体がないからね。」

「機体が無いとは？」

少し困ったような表情をしながら、先ほどのキシリアの通信の事を話すと

「それは幾ら何でも横暴すぎるのでは！」

案の定ガトーは怒り、クスコとマリオンもガトーと同じように見えた。

「ガトー中尉の言いたいことはわかるが、ガルマ大佐は私と同じで初陣となる。私の機体は大佐が乗り、クスコ中尉の機体に優秀なパイ

ロットが乗れば、それだけで戦況は変わるはずだ。それに、ドムが量産されるまでの間だ。それほどの問題はないよ。」

俺はそう言うと、三人は何か言いたいことがありそうな様子だった。

「話は以上だ。明日の出撃に備え、ゆつくりしてくれ。」

そして、三人は部屋を退出し俺も明日に備え休むことにした。

翌日、俺は基地の格納庫で、すでに整備が完了された指揮官用ザクを見上げていた。

「来たか。」

パイロットスーツに着替えたガトー達も到着し、俺はザクIIS型に乗り、ガトーとクスコはザクIIJ型にマリオンはザクキャノンに乗り始めた。

「さて、今回の任務には支援部隊としてマゼラ・アタック部隊も随伴する。」

すでにMSと一緒に量産が開始されているマゼラ・アタックが、ザクの近くに五台並んでいた。

「それでは出撃する！」

「了解！」

それからオデッサを出撃した俺の部隊は、残存部隊が潜伏していると思われる廃墟の前に到着した。

先行させた偵察部隊の報告では、連邦軍の残存部隊はこの廃墟のどこかに潜伏しているらしい。

「さて、各機は命令があるまで発砲を禁止する。だが、警戒は怠るな。」

「了解！」

三人の声を聞き、俺はコックピットを開け出撃前に用意した拡声機を持ち、問題なく動作してる事を確認して始めることにした。

「潜伏している連邦軍に告ぐ、私はレイン・ザビだ。武器を捨ておとなしく投降するなら南極条約に従い丁重に扱うことを約束する。15分待つ。もし15分過ぎて答えを出さなければ攻撃を開始する。諸君らの賢明な判断を期待する。」

そう言つてコックピットの中に戻り、俺は時間をセットして15分待つことにし、ガトー達やマゼラ・アタック隊には警戒を強めるように命令した。

それから15分待つと、廃墟から白旗を掲げた残存部隊が出てきた。

俺は歩兵部隊に警戒しながらも丁重に拘束するよう命令し、問題なく任務が完了したと思つたがここで予想外の問題が起きた。

「隊長！こちらに連邦の部隊が近づいてきます！」

レーダーで確認するとマリオンの言う通り、数台の61式戦車やホバートラックと多数のフライマンタや数機のデプロッグがこちらに近づいてきていた。

「隊長どうしますか？」

「ガトー中尉とクスコ中尉は二台のマゼラ・アタックと共に、捕虜を連れて基地に戻れ。その間残つた部隊はここで足止めをする。私が前に出るからマゼラ・アタックとマリオン少尉は援護してくれ。」

「了解！」

俺の命令に三人は従い、マゼラ・アタック部隊も命令に従い行動を開始した。

「まったくこんな時に！」

俺は航空部隊にザクマシンガンを撃ちながら前に出て、マリオンのザクキャノンやマゼラ・アタックは61式戦車などの陸上部隊に砲撃し牽制していた。

航空部隊のフライマンタ数機が捕虜を乗せたトラックに向かったが、護衛についていたガトー達の攻撃に撃ち落とされあちらは問題なかった。

「やっぱりデプロッグはきついな……」

フライマンタはともかく重爆撃機であるデプロッグは、フライマンタに比べ装甲は固くザクマシンガンでの射撃に中々落とせずだった。

デプロッグやフライマンタから投下される爆弾を回避しながらザクマシンガンを撃つが、数が多くザク一機ではこれ以上の足止めはきつかった。

レーダーでガトー達の方を確認すると、すでにオデッサ基地の近くにおりこちらでも退くことにした。

「マリオン！あちらはもう問題はないからこちらでも退くぞ！」  
「了解！」

俺はザクマシンガンを撃ちながら後退し、マリオンやマゼラ・アタックも後退しながら砲撃したが、それでも敵部隊はしつこく追いかけて攻撃し、俺は被弾し右腕を破壊されてしまった。

「大丈夫ですか中佐！」  
「大丈夫だ。右腕をやられたただけだ。」

とはいえこれ以上戦えば、こちらがやられるのは目に見えており俺はどうすればと焦っていた時、後方から敵部隊に対しての砲撃が放たれ数機の航空部隊と数台の陸上部隊が撃ち落とされた。

「無事ですか中佐！」

こっちにガトーとクスコのザクIIJ型が近づいてきた。

「二人とも捕虜の方は？」

「捕虜は基地の部隊に任せ、援軍を連れてきました。」

ガトーの言葉に後ろを見ると、五機のザクIIJ型と六台のマゼラ・アタックが敵部隊に攻撃を仕掛けており、敵部隊はこちらの援軍にこれ以上の戦闘の続行は無意味と考え後退し始めた。

どうにか無事に戦闘を終えたことに、俺は安心し基地に戻るのであった。

基地に戻って俺は今回の任務での被害が、俺が乗ったザクIIS型の右腕一つと軽傷者が数名という小さな被害に、こちらの陣営に死者が出なかったことに安心した。

あの後ガトーやクスコ、マリオンは俺のことを心配してあまり無茶はしないでくれと怒られてしまい、三人に心配をかけてしまったことに俺は強く反省した。

それから今回の任務での捕虜は南極条約に従い、丁重に扱い今は連邦の情報を尋問していると思われるだろう。

そう考えながら俺は今回の任務での報告書を作成し、それを司令部に提出し今日は休むことにした。



それから数日が経ち、第二次降下作戦が開始されガルマ大佐率いる第2機動師団及び第3機動師団は、北米大陸の制圧に成功しジオンはまた新たな拠点を手に入れるのであった。

## 第5話

第二次降下作戦が終了し数日が経ちドムの量産が開始された頃、北米大陸のキャリフォルニアベースにいるガルマ大佐から通信が来て俺は通信に出ていた。

「レイン、元気だったか？」

「はい。ガルマ兄様もお変わりはなく。」

「そうか。レイン、話の前に謝らせてくれないか？」

「謝らせてくれとはどういうことですか兄様？」

突然ガルマが謝らせてくれと言われ、俺は何のことだと思った。

「ドムの件だ。」

ドムの件と言われ、俺はあの事かと思い出した。

「お前の機体を姉上が私に譲るように言ったそうではないか。」

そう第一次降下作戦の翌日にキシリアから、俺の乗機であるドムをガルマに譲ってくれと言われたことを思い出し、最初は面倒だと思っただがドムの量産が開始されている今では忘れていた。

「兄様は私と同じで初陣となります。キシリア姉様はそんなガルマ兄様を大切に思っているからあのようにしたんです。だから、あまり姉様を責めないで下さい。」

俺の言葉にガルマは少し考えた後、仕方ないという表情をしていた。

「全く、お前は相変わらず優しいな。」

「いえ、それほどでも。」

「話は以上だ。レイン、これから忙しくなるが共にジオンの勝利のためには戦おう。」

「はい。わかりました兄様。」

そう言っただけ俺は通信を切った。

「第二次降下作戦も終了したか。これから忙しくなるな」

そう言っただけ俺は一枚の設計図を手を持った。

その設計図には書かれているのは俺が主導で開発が進められているMS-09K-2ドム・キャノンであった。

ドムが量産されている今では、ザクキャノンではドムの機動性に対応できないため、現在開発が進められている。

とはいえ、ベースのドムはすでにあるので、あとは主武装のツインキャノンの開発と起動実験だけだ。

そう思いながら俺は書類を整理していた。

それから数日が経ち、第三次降下作戦開始が近づいてきている時、開発部から報告がきた。

ついに試作型ドム・キャノンが完成したらしい。

俺はすぐに格納庫に向かうことにした。

格納庫では整備員が試作型ドム・キャノンの起動実験のため、忙しく動いていた。

整備員が格納庫に入ってきたレインを見ると敬礼し、俺は気にせず準備を進めるように言った。

俺は小隊の整備主任であるルーベ・アルセルトに近づき、準備がどれまで進んでるか聞かすために近づいた。

「ルーベ主任、準備はどこまで進んでる？」

声をかけられ先ほどまで指示を出していたルーベは、近づいてくるレインに気づいた。

「中佐！来てたのかい？」

「ああ。私もこの機体の開発に関わったから気になってね。」

「へえー。中佐も気になるんだね。」

お互い何事もなく話しているが初めて会った時はルーベが慣れない敬語を使っていて、俺があまり無理して敬語を使わなくていいと言った瞬間、今のように気軽に話している。

ちなみにルーベは見た目がボーイッシュの為男に間違えられやすく、以前一人の整備員がルーベのことを男だと思っていたと言った時、ルーベはその整備員に馬乗りししこたま殴っていた。

この事からここにいる整備員達は、ルーベを男と言って馬鹿にしなると心に決めたそうだ。

「それでどこまで進んでるんだ？」

「ほとんど準備は完了してるけど、パイロットがまだね。」

どうやら起動実験のためのパイロットが来ていないため実験ができないうのだ。

「私が乗ろうか?」

「え、中佐が!そりゃあ乗ってくれるのは嬉しいけど・・・」

やはり実験で怪我されるわけにもいれないが、これ以上時間をかけるわけにいかずルーベは悩んでいた。

「あまり気にする必要するな。ルーベが整備した機体なら問題ないさ。」

「そこまで言うなら仕方ないなあ」

信頼されていることがわかると、ルーベは照れ臭そうにしていた。

そして、レインはパイロットスーツに着替えず、そのまま試作型ドムキャノンに搭乗し起動した。

『どう?』

機器を確認し、問題なことを確認する。

「大丈夫だ問題はない。」

『それじゃあ始めよつか』

「ああ、始めようか。」

それからレインはドムキャノンの走行、主武装のツインキャノンの実験を始めた。

実験は問題なく進み、無事に終了した。

「どうだった中佐?」

「何も問題は無かったよ。流石ルーベが整備した機体だな。」

「それ程でもないよお」

そう言いながらも嬉しそうにしており、レインをバシバシ叩いていた。

「今回の実験データは役に立つか?」

「うん。今回の実験データは絶対に役に立つよ。」

あとのことをルーベに任せ、レインは汗を流す為シャワーを浴びることにした。

シャワーを浴び終えたレインはドム三機を要請し、ドム・キャノン試作型を隊に配備するように根回しを行なった。

それから数日が経ち、ついに第三次降下作戦が開始した。

量産したドムを主力とした第4機動師団がオセアニア大陸及び中央・東南アジアに降下を開始し、ザクとは機動性や装甲が違う量産されたドムに連邦軍は為すすべもなく、ジオン公国軍はオセアニア大陸及び中央・東南アジアを制圧し支配下に置いた。

## 第6話

第三次降下作戦は無事に成功しオセアニア大陸及び中央・東南アジアを支配下に置きジオン軍は地上の半分を制圧した。

だが、戦線が拡大したことにより補給が滞ってしまい戦線は膠着状態となった。

そんな中、オデッサ基地の一室でレインは再びガルマと通信していた。

この時ガルマは第二次降下作戦の功績で、准将に昇進し地球方面軍司令に着任していた。

「独立部隊・・・ですか？」

『そうだ。正確には遊撃部隊が正しいだろう。』

「ふむ・・・」

ガルマの言葉にレインは考えていた。

「(独立部隊ならどこかに所属せず自分で動くことができるな・・・)」  
『レイン?』

「司令、謹んでお受けいたします。」

『そうか。それとおめでとうレイン大佐。』

ガルマの大佐という言葉にレインは驚き目を丸くした。

「大佐・・・とは?」

『ふふ、実はドムの開発と第一次降下作戦の功績により大佐に昇進することが決まったんだ。』

突然の昇進に驚く中ガルマから理由を聞かされるが、それでもそう簡単に昇進するものなのかとレインは驚いていた。

とはいえ何時迄も驚いているわけにはいかなかった。

「わかりました。ジオン勝利の為に更に励みます。」

昇進を受けたレインをガルマは嬉しそうに頷いていた。

『そうか。母艦としてガウ攻撃空母とファットアングルを1隻ずつ送る。人員に関してはどうする?』

「人員に関してはこちらで決めるつもりです。」

人員に関しては当てるはある為問題はないことを伝えた。

『わかった。これから大変だと思うが体には気をつけるんだぞ。』

「それはガルマ兄様も同じですよ。お互いに頑張りましょう。」

実際司令になったことで、とても忙しいはずだろう。

『そうだな。父上も心配していたからたまには顔を出してあげろよ。』  
「わかっていますよ。それでは。」

通信を切り椅子にもたれかかり、レインは眼を閉じ考え始める。

如何にドムがザクより優秀で量産が開始されても、物資の乏しいジオンでは多く量産することは難しい。

また、不慣れな環境に兵達の中には不安に思う者もいる上に、この膠着状態を連邦の特にレビルがそのまま見過ごすとは思えない。

「そのためにはどうにか戦局を有利にするしかない。」

そう呟きレインは手元の設計図に目を落とす。

設計図に書かれている機体は、型式番号MSM-07ズゴックである。

この設計図もドムと同様に機体のフォルムに特徴や武装だけである。

この設計図を書いた理由は、第二次降下作戦でキャリフォルニアベースを制圧した時に連邦軍の潜水艦を鹵獲したためである。

潜水艦を手に入れたことで開発部は水中型のMSの開発を進めているとルーベから聞き、このズゴックの設計図を書いた。

当初はハイゴッグの方も考えたが、下手に高性能すぎる機体を開発すると量産の際に物資を多く消費してしまうため、今はズゴックの方を書いた。

それにズゴックのデータを基にズゴックEの開発をできるから、今はズゴックに留めている。

今の所、ジオニックス社やツイマッド社などの各企業も水中型MSの開発はしたが、水中でのデータが余りないため開発が終了しているのはザクマリンやゴッグなどである。

この二機ではまだ心もとないため、バランスがいいズゴックが丁度いいのである。

とはいえズゴックの開発が成功しても、慎重に実験を行いデータを

採取しなければ事故なども起きる可能性がある。

そう考えたレインは眼を開け、M I P社にズゴックの設計図を送り部隊の人員確保の為にグラナダに通信を開く。

「これから忙しくなるな。」

レインは気を引き締めやる気を出すのであった。



## 第7話

オデッサ基地内で一人の女性士官が、兵にある場所に案内されていた。

「まったく！あの女いったいどういうつもりなんだい？」

自分の上司であるザビ家の人間であるキシリアの顔を思い出しながら、声に出したいが女性は内心で悪態をつく。

もし口に出してしまえば、ただでさえ立場が悪いのに更に立場を悪くしてしまう。

その女性の名はシーマ・ガラハウ。

ジオン公国軍海兵隊に所属し、自らの部隊であるシーマ艦隊の指揮官でもある。

本来なら彼女や彼女の率いる部隊は作戦命令がでるまで宇宙で待機しているはずだった。

ところが、彼女の上司であるキシリア・ザビからの命令で地球に降りたのである。

だが、何の詳細を教えられないまま地球に降りるよう命令されたため、キシリアの意図がわからずシーマは困惑していた。

「ここだ、入れ。」

基地を案内していた兵士の声に気づきシーマは部屋に入る。

部屋の中にはまだ年若い白髪青年が座っていた。

その青年はドムの開発者でありキシリアの弟でもあるレイン・ザビであった。

「よく来てくれたねシーマ少佐。気にせずにかけてくれたまえ。」

気にせずとレインは言うが、シーマにとっては自分の上司の弟でありザビ家の人間であるため気が気でない状態であった。

とはいえ下手に気に触ることをするわけにはいかず、用意された椅子に座る。

「さて、今回少佐に来てもらったのは、我が独立部隊に少佐の部隊を加えたく思い呼んだんだ。」

レインの言葉にシーマは驚いたような表情をしていた。

レインの言うことはシーマだけでなく自らの率いる艦隊までも引き抜くということである。

「信じられないという表情だね。」

「そ、それはー！」

シーマは連邦との開戦直後に行ったサイド1・2・4に対して毒ガスを流し込んだことや、これまで破壊工作などの汚れ仕事を行っていたため、シーマや海兵隊は周りの兵士達から忌み嫌われることとなった。

実際ここまで案内した兵士もここに来るまですれ違った兵士も、シーマが海兵隊に所属する人間だとわかるとすぐさま軽蔑する様な視線を向けていた。

そんな自分や部下達を引き抜くということが信じられなかった。

「シーマ少佐が驚くのも無理はない。実はキシリア少将にも相談した時も驚かれてね。」

「あの、大佐はなぜ自分達を？」

おずおずとシーマは自分達を引き抜いた理由を聞いた。

「ふむ。海兵隊に関しての話聞けば、軍内では海兵隊に良くない話しか聞かされたよ。」

その言葉にシーマは表情暗くした。

「しかし、私は逆に優秀だと思つたよ。」

「え？」

突然の賛美の言葉にシーマは気の抜けた声が出てしまった。

「汚れ仕事だと言われているが、それらをこなす海兵隊を私は逆に優秀だと思つてね。だから、私は海兵隊を指揮する少佐やその部下達が欲しくなつたんだ。」

レインの言葉にシーマは正直言つて理解できなかつた。

これまで多くの破壊工作や人には言えないような事をしてきた自分達に、これほどの賛美の言葉を言われたことはなかつた。

「というわけで、少佐や少佐の部下達はこれからは私の隊に加わってもらう。」

「りよ、了解しました。」

「他の隊員と顔合わせは後日行う。それまで少佐は自分の部下達に今回の事を伝えてもらう、下がっていいよ。」

「はっ！」

敬礼して退室するシーマの表情は暗くなく若干明るくなっていった。

「ふうー、疲れたー。」

シーマが退室したことを確認したレインは椅子にもたれかかった。「やっぱり慣れないなこういうこと。」

原作のキャラクターと顔を合わせて話すのはそう慣れる事ではない。

ガトー達と顔を合わせても内心では喜びと同時に緊張してしまう。

「これでシーマが死亡することは無くなったかな？」

シーマは毒ガス事件や海兵隊の事で、誰からも忌み嫌われ助けられることもないまま死んでしまった。

「とはいえ優秀な部下を手に入れることができたのは良いことだな。」

シーマ自身もそうだがその部下達も、汚れ仕事をやるだけあって新兵に比べ実力はある。

「これからは大変だが、生きるために頑張らないとな。」

そう決心すると扉がノックされた。

急いで座り直し服が乱れていないか確認した。

「入れ。」

入って来たのは基地に駐在する兵士だった。

「レイン大佐、ガルマ准将から指令書お渡します。」

「ご苦労。」

労いの言葉を送り、兵士は敬礼して部屋を退室した。

「これはまた・・・」

指令書には近々北京基地を攻略することが書かれており、その攻略作戦にレインの部隊も参戦することが書かれていた。

## 第8話

ガルマからの命令を受けたレイン達は、ガウ攻撃空母とファットアングルにMSや弾薬などの物資を積み込み、オデッサ基地を発進し北京基地に向かっていた。

「調子はどうですか？」

レインは軍服の袖を破りまるで海賊のような格好をする男に尋ねた。

「なに問題ありませんよ。これぐらいすぐにどうとでもできますよ。」

そう答える男の名はデトローフ・コツセル、シーマの副官で階級は中尉だ。

当初艦長をシーマに頼もうと思ったが、シーマがコツセルを艦長に推薦したためだ。

シーマが推薦するほどの人物なら問題ないと判断した。

「とりあえずは問題ありませんから大佐は休んだらどうですかい？」

「休むにしても色々とやらないといけなくてね。」

「それは大変そうですね。」

苦笑しながら言うと、コツセルは笑いながらそう言った。

「それじゃ頼んだよ。」

「了解。」

艦橋を出たレインは格納庫に向かった。

格納庫に到着すると3機のドムに1機のドムキヤノンが並んでいた。

「やあ、調子はどうだいルーベ？」

その内の1機に整備員に指示を出しているルーベを見つけ声をかけた。

「ん？問題ないよレイン。いやレイン大佐？」

「いつもの呼び方で頼むよ。」

「そう？それでどうしたのレイン？」

レインとルーベは何気なく話しているがレインが大佐に昇進した時にルーベはなるべく敬語で話していたが、あまりにも似合わなくて

笑ってしまった。

レインが素で話していいと言った日からお互いに素で話すようになった。

「いや、調子はどうだと思ってるね。」

「そんなの大丈夫だよ。腕によりをかけて整備するからね。」

「それは楽しみだな。」

ルーベの整備の腕は疑いようがないため安心できる。

「それじゃ邪魔になると思うから退散するよ。」

「わかった。またねレイン。」

「ああ。」

手を振って格納庫を去ったレインは用意された部屋に戻る。

部屋に入って椅子に座って体を伸ばす。

「今のところは問題はないか。」

艦内を回って様子を見たが今のところ問題はなかった。

「といってもなあ。」

気になるのはガトーの事だ。

シーマや彼女の部隊がレインの部隊に加入した際、シーマ達が加入することを反対していた。

理由は当然これまで彼女達が行なっていた事だった。

義を重んじる彼の性格としては加入する事を反対するのは当然だったが、そういった作戦を命令したのは上の人間であり責任は彼女達には無いと言いつつにか納得してもらった。

だが、ガトーはそれでもまだ信用していないようだったので、彼女達の今後の働き次第だろう。

「今は考えても仕方ないか。」

今考えても仕方ないと思えば簡易式のベッドに横になる。

「寝よ。」

レインは呼び出しが来るまで仮眠を取ることにした。

レインが仮眠をとってる頃、偶然会ったシーマとガトーは一触触発の雰囲気が出ていた。

「それであたしに何か用かいガトー中尉？」

「シーマ少佐、先に言っておく。私は貴様達海兵隊を信用していない。」

「はん！はつきり言うね。」

「当然だ。貴様らが行ってきた非道な行い許せるはずが無いだろう。」

「非道な行いと言われ、シーマは一瞬だけ顔をしかめた。」

「別にあんたに許してもらおうとは思ってないさ。」

「もし貴様らが不審な行動をとれば私は躊躇なく貴様らを撃つ。」

「そんな堂々と言うなんて笑えるね。」

階級はシーマの方が上なのに、撃つと宣言するガトーにシーマは笑っていた。

「話はそれだけだ。」

言うことを言ったガトーは去ろうとした。

「中尉一つだけ言つとくけど、あたしらは・・・あたしらを理解してくれた大佐を裏切るつもりはない。」

シーマが言った言葉にガトーは振り返るが、シーマはすでに去っていた。

そして、仮眠をとっていたレインは扉を叩く音で目を覚ました。

「大佐！そろそろ北京基地に到着します。大佐！」

呼びに来たのは声からしてマリオンのようだ。

「ああ。今いくよ。」

パイロットスーツに着替え、寝癖がないか確認してレインは部屋を出た。

「それじゃ行くか。」

部屋の前にはすでにパイロットスーツに着替えたマリオンが立っていた。

「はい。」

二人は格納庫に向かうと、そこにはガトーとシーマの二人がすでに到着していた。

「遅れてすまない。」

「いえ、問題ありません。」

「それでどうするんだい？」

「今回の作戦での我が隊の役目は陽動だ。敵の目をこちらに向けている隙を友軍が突くってという作戦だそうだ。」

今回の作戦で使用されるドムはレイン達の乗機しかなく、各戦線への配備は未だ進んでいないためだ。

オデッサの鉱物資源を手に入れても加工などで時間がかかるため、量産されたドムは北米にしか配備されていない。

そのためレイン達が陽動として敵の目を引き付けている間に、本隊が密かに進軍し基地を制圧するという作戦だ。

「なお、クスコ中尉は我々が出撃した後のガウの護衛を頼んでる。」  
そのためクスコはファットアングルの方で待機している。

「陽動で危険であるが、こつちには頼れる部下達がいるから大丈夫だよ。」

「身に余る言葉ありがとうございます。」

「そこまで言うならやってやるさ。」

「任せて大佐。」

三人のやる気は充分といった感じだ。

「さて、そろそろ搭乗しよう。」

「了解！」

マリオンはドム・キャノンに搭乗し、レイン達はドムに搭乗した。

ガウの後部ハッチが開き、レインのドムが前に出る。

「出撃するー！」

ガウから降下し、着地する直前にスラスタを全開にして着地した。

他の機体も同様に着地して無事に降下した。

そして、ファットアングルから出撃した一機のザクIIS型とザクJ型とザク・キャノンが近づいてきた。

「それじゃあガウはこのまま待機。クスコはガウの護衛を頼む。」

「了解。気をつけてください大佐。」

ザクIIS型に搭乗しているクスコからの応答を確認して、三機のドムと一機のドム・キャノンは北京基地に進軍する。

一方北京基地ではジオンが攻めて来る事は事前に入手していたが、それでも基地内は慌ただしかった。

「早く迎撃態勢を整えるんだ！」

「第205機甲中隊は急いで出撃しろ！」

「例のアレも用意しろ！」

オペレーター達は矢継ぎ早に命令を伝えていた。

「敵影確認！スカート付きが四機です！」

「たった四機だと？」

司令部で命令を出していた者達はたったの四機ということに呆気にとられていた。

レイン達は自分達に向かってくる砲撃をホバー走行で回避しながら北京基地に進んでいた。

「いけっ！」

レインは迎撃してくるトーチカに向かってジャイアント・バズを撃ち込んで破壊していき、基地の外を嘲笑うかのように動き回っていた。

「食いついてくれてるな。」

基地から発進した61式戦車やファンファンにフライマンタが続々とレイン達に向かって来ていた。

「あとは本隊が制圧するまで時間を稼ぐだけだ。」

何事も無く作戦が進むと思っていると。

「うわっ！」

61式戦車の砲撃やファンファンのミサイルとは違う攻撃に被弾してしまった。

「大丈夫ですか大佐？」

「ああ、機体には問題はない。」

ドムの厚い装甲のお陰で大した損害ではないが、攻撃が来た方向を確認すると見慣れた機体が立っていた。

「あれは・・・ザク、だと？」



基地からこちらに向かってくる五機のザクにレイン達は目を疑った。

「何でザクが敵の基地から出てくんだよ！」

ザク・マシンガン避けながら言うシーマの言葉はこの場にいるレイン達も同様の思いだった。

「おそらく鹵獲した機体を使ってるはずだ。」

「おのれ連邦め！ザクをあのように辱めるとは！」

連邦がザクを使うことにガトーはとてつもなく憤っていた。

「だけど、ドムの敵じゃない！」

ザクが出てきたことには驚いたが、ドムに比べれば大して敵ではない。

問題は61式戦車やファンファンなどによる援護が邪魔だった。

「ああもう！鬱陶しいね！」

「こんな攻撃で！」

「大丈夫かマリオン！」

「な、何とか大丈夫。」

敵の集中攻撃に押され始めていると、基地の方から爆発が起きた。

それと同時に別方向から航空部隊と機甲部隊が攻撃された。

「これより援護します！」

そう言っ近づいてきたのは友軍の信号が出ているザクだった。

「どうやら作戦が上手くいったようだな。」

味方が撃墜され始めたことに鹵獲されたザクが動揺して、攻撃の手が止まっていた。

「一気に墜とすぞ！」

「了解！」

敵が動揺している隙を突いてザクを攻撃し、ザクは呆気なく撃墜された。

「大佐、どうやら本隊も司令部を制圧したようです。」

「そうか……。」

そして、ジオン公国軍はまた一つ重要拠点を制圧したのであった。

## 第9話

北京基地を制圧したジオン軍はザクなどのMSの手を借り、戦闘の際に破壊した外壁の瓦礫の撤去作業を行っていた。

『北京基地をこうも簡単に攻略するなんて凄いいじゃないかレイーン！』  
そんな中レイーンはガルマに今回の作戦結果を報告していた。

「いえ、これは私だけの力だけではありません。ひとえに将兵達のお陰です。」

ザクが出てきて本当に焦ったが味方の部隊が援護してくれたお陰でどうにか勝てたのだ。

「それより兄様報告書は読んでいただけましたか。」

報告書という言葉にガルマの表情は兄としてではなく、地球方面軍司令官の表情に変わった。

『ああ読ましてもらったよ。まさか連邦が我が軍のザクを使うとはな。』

「あの時は正直焦りました。味方の到着が遅かったら死んでいたかもしれない。」

『しかし、どうやってザクを？』

「おそらくはザクを鹵獲したか、あるいは内部にいるスパイの可能性も。」

『前者はともかく後者は考えたくないな。』

内部にスパイがいるという可能性にガルマは苦虫を潰したような表情をしていた。

それも当然のはずだ。

戦闘でザクを鹵獲されたのなら仕方ないと納得できるが、内部に潜入しているスパイがザクを連邦に渡したのであれば司令官であるガルマとしては悔しいのだろう。

「(もう一つの可能性もあるけど、この可能性だけは当たって欲しくないな。)」

もう一つの可能性、それは内部の人間が連邦と裏取引をしてザクを渡したことだ。

連邦から取引を持ちかけたのか、それとも内部の人間から持ちかけたのかわからないがこの可能性はそう簡単に言っていないものではない。

『レイン、疲れているところすまないが一つ頼まれてくれないか?』

「それは一体どのようなことでしょうか?」

『実はここ最近、我が軍の物資集積所を正体不明の敵が襲撃しているようなんだ。』

「物資集積所を襲撃ですか?」

物資集積所を襲撃という単語を聞き、レインは聞いた覚えがあるがどんな内容だったかおぼろげ思い出すことができなかった。

『ああ。集積所にいた兵達は全滅していて敵の正体がわからないそうだが、レインの報告からおそらく鹵獲したザクによる連邦の襲撃だと私は考えている。』

「なるほど。それでその襲撃者を発見して殲滅すればいいということでしょうか?」

『そうだ。すまないがやってくれるか?』

「了解しました。お任せくださいガルマ司令。」

「疲れているのに本当にすまないなレイン。』

「いえ、お気になさらず。」

そう言って通信を切ったレインはある人物に通信を繋いだ。

『お前の方から通信が来るとはどうしたレイン?』

しばらくして通信に出た相手はキシリアだった。

「実は姉様に頼みたいことがあります。」

『ほう?それはどのようなことか?』

レインはガルマで話したことをキシリアにも話し、ガルマには言わなかったもう一つの可能性も話した。

『なるほど。頼みたいことというのはこのことの調査か?』

「はい。」

こういった裏工作はザビ家の中ではキシリアが得意としており、レインはこの件をキシリアに任せようと考えていた。

『よかろう。この件は私が預かる。』

「ありがとうございます姉様。」

『気にすることは無い。それよりも北京攻略のことは聞いてるぞ、よくやったなレイン。』

「いえ、私などはまだまだ。あの作戦に参戦した将兵達のおかげです。」

「そうか。だが、あまり無茶はするなよ。」

「はい。大丈夫ですよ姉様。」

通信を切って椅子にもたれかかったレインは目を閉じて、リラック  
スしているとあることを思い出した。

「思い出した！ザクの鹵獲機で集積所の襲撃って！」

レインは立ち上がると急いでガウに向かうのであった。